管理職必携

安心・安全の新常識

万引と青少年の規範意識㊦

「ダメ」と言える勇気を

福井昴（ふくい・こう）／全国万引犯罪防止機構理事・事務局長

万引をした少年の28・8％が、その理由を「ゲーム感覚で」と回答している（平成21年8月・警視庁「万引に関する調査研究報告書」より）。その一方で、「友人が止めれば万引をしなかった」と回答する少年が約30％いる（平成23年2月・北海道警察犯罪脆弱者対策研究委員会報告）。少額であっても、万引は窃盗犯罪であるから、やめるように注意する勇気が大切である。

啓発ポスターに大きな反響

こうしたデータなども踏まえて、特定非営利活動法人・全国万引犯罪防止機構（万防機構）では、昨年6月に、「悪事に勝つ強い心」と「ダメ！と言える勇気」をデータとともに訴えた図のような壁新聞ポスターを全国の中学校約1万6500校、都道府県・政令市・特定市の教育委員会に配布した。作成に当たっては全日本中学校長会生徒指導部のご協力をいただいた。

このポスターでは、「悪いことだと知っているのに、ついやってしまったことが自分や家族、お店の人を苦しめることになる」「万引は窃盗罪、10年以下の懲役または50万円以下の罰金」などの指摘とともに、万引被害を受けた商店の経営が行き詰まってしまったという切実な「声」も紹介した。

ポスターには学校現場から大きな反響があった。同時に実施したアンケート調査にも2500件以上の回答があり、「掲載したデータのほかにもっと知りたい」という声も多かった。このポスターは、特に掲示期間は明示していなかったが、多くの学校では配布した6月から、本年度末まで掲示していただいた。さらに他の掲示物と同様ではなく、生徒がよく目にするような場所に掲示するなど、中学校の先生方にもいろいろと工夫していただいた。

今回は、他の生徒が友だちの万引に気づいて止めるという内容だが、次は、「自分で気づいて止める」ことの大切さを訴える内容を検討している。

万引を考える良書を紹介

万引犯罪を減らすには、万引は犯罪という知識だけではなくて、行動につながる意識をしっかり持ってもらう必要がある。これは学校や家庭での教育の役割が大きい。そこで、万引をテーマにして、子どもたちの良心に訴えかける本を、保護者などの集まりなどで紹介したり、保護者も交えて「読み聞かせ」をしてもらう活動も行ってきた。

具体的には、小学生向けには絵本『あかいセミ』（福田岩緒・作、文研出版）、中学生向けには『雨あがりのメデジン』（アルフレッド・ゴメス＝セルダ・作、鈴木出版）を紹介している（写真）。前者は文具店で赤い消しゴムを万引してしまった子どもの後悔する気持ちを、後者は貧しさゆえに町にできた図書館から本を盗み出す少年と、その少年のことを心配する友人の気持ちを描いている。

特に前者の絵本は、葛藤する子どもの心や、いけないことという気づきをテーマにしたもので、作中の母親のアドバイスなども家庭での参考になる内容である。実際に、小学校からの要請があって、この本を教材にして、万引はいけないことという規範意識を育てる機会になっている。学校の関係者やPTAの関係者には、こうした本も含

めて、子どもたちの気づきを励ます働き掛けをしていただきたいと願っている。

中・高・大学生自身が啓発活動

昨年、万防機構では、「地域の万引犯罪防止対策活動調査報告書―万引を許さない地域環境づくりのための26事例」を発行した。その中では、防犯ボランティアと連携した対策の事例として、中学生・高校生・大学生の有志ボランティアによる同世代の少年の規範意識の啓発を進める活動事例なども紹介している。

これは山口県での事例で、「少年リーダーズ」と呼称する中学生・高校生・大学生の有志が警察と共同して、万引抑止活動をはじめ、自転車防犯点検や非行防止キャンペーンなど、同世代の少年の規範意識の啓発を進めるための、さまざまな活動を行っているものである。

その代表的な事例として「C・C作戦」というものがある。「チェック（点検）＆チェック（抑止）」の略で、「シーシー作戦」と呼んでいる。具体的には、スーパーなどの店側の協力を得て、少年リーダーズが万引防止の視点から店内を巡回し、商品の陳列方法や防犯設備などの点検を行う。点検修了後は、意見交換を行い、改善すべき点は店側の協力を得て改善し、少年リーダーズと店側の双方が協力して万引をさせない環境づくりに貢献している。

全国の中学校に配布した万引防止ポスター

『雨あがりのメデジン』

『あかいセミ』

豊かな街づくりに、役立つ 宝くじ。

宝くじの収益金は、図書館や動物園、学校や公園の整備をはじめ、少子高齢化対策や災害に強い街づくりまで、いろいろなかたちで、みなさまの暮らしに役立てられています。

社会の規範意識を奪う犯罪との認識で

万引という言葉に「少年期の一過性の犯罪」といった軽い印象があるため、警察庁の推定で被害額が年間4614億円（一日当たり12・6億円）という膨大な被害額にもかかわらず、なかなか改善されない。店舗が倒産する、部員の一人が万引したために甲子園に出場できないなど、万引は人生を大きく変えてしまう犯罪である。

目には見えないが、大切な財産である絆、そして規範意識を守るための絶対防衛ラインがまさに万引対策である。「万引はこの社会の規範意識を奪う犯罪」であるという認識を一人一人が持つことが肝要であり、そのためには、報道機関・地元メディアの協力も必要である。それらの活動により、身近な人々の関心が高まることを求めたい。

万引犯罪に対する考え方・取り組みについては、新しい視点も醸成されつつある。万引対策をなおざりにしていては、地域や産業がダメになる、という危機意識を社会全体が持つ必要がある。

盗品のネット販売なども広がりつつある現状では、規範意識を育てる教育の役割が大切である。誰も見ていなくても「お天道様が見ている」という日本古来の意識を取り戻すことが大切ではないだろうか。

全国万引犯罪防止機構＝http://www.manboukikou.jp/